Title	寛和年間の内裏歌合について
Sub Title	On Uta-awase presided by Emperor Kazan during the period of Kanna
Author	金子, 英世(Kaneko, Hideyo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1997
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.72, (1997. 6) ,p.1- 22
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00720001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

寛和年間の内裏歌合について

金子 英世

寛和年間（九八五―九八七）に当たる時期は、和歌史の上で『後撰集』時代から『拾遺集』時代への転換期の中に位置づけられる。寛和年間の開催として記録に残る二度の内裏歌合には、それぞれ時代に先駆けた特性や文芸本位の姿勢が指摘されており、これらは歌合史において極めて注目すべき存在といえることができる。⁽¹⁾

この二度歌合の主催者である花山天皇については、東宮時代から近臣に題を賜い歌を詠ませたこと、在位中に能宣らる家集を召したことなどが伝えられており、その歌道への執心ぶりを窺い知ることができる。⁽²⁾ また、『拾遺集』撰集作業に関しては不明な点が多いが、『拾遺集』を花山院親撰に近いものとする考えは、今日ほぼ定説化しているといえよう。小町谷照彦氏は拾遺集時代の出発点を「花山院を中心とする和歌サークルの形成」に求められ、『拾遺集』を「花山院サークルの墓碑銘的産物」と捉えられている。⁽³⁾ そうした観点からいえば、寛和年間の内裏歌合は、いわゆる「花山院サークル」前期の活動の頂点を示す催しと見ることができよう。『拾遺集』撰集に至る花山院周辺の動向を辿る意味においても、寛和期の内裏歌壇の性格付けが求められるべきだといえよう。

またこの時期は、初期定数歌に代表される、新しい和歌表現の模索が行われつつあった時代でもある。河原院周辺の歌人たちによって試みられた漢詩取りや万葉・古歌的表現の受谷が、この時代の新風和歌を切り拓いたことについては、近年、様々な角度から検討が加えられている。久保木寿子氏は、初期定数歌に共通して見られる和歌素材が、寛和から正暦に渡る花山院周辺の歌合題として多く摂取されていることを指摘され、河原院の流れを汲む和歌活動の場として、花山院周辺の和歌壇を想定されている。⁽⁴⁾ このような視点に立つと、寛和期の内裏歌壇が示す特性は、和歌史の展開の上で、重要な意味を持つものとして浮かび上がってくるように思われる。

以下で、寛和年間の内裏歌合の出詠歌およびその周辺を検討することによって、花山天皇を中心とした内裏歌壇の性格と、その背後にある和歌的状况を考察したい。まず、盛大な晴れの儀として行われた寛和二年の歌合について、検討を加える。⁽⁵⁾

一 「寛和二年 内裏歌合」について

寛和二年六月十日、寛和年間後度の内裏歌合は花山天皇の側近であり叔父に当たる藤原義懐を判者に、左の講師を公任、右を長能が務め、二十題二十番の形で行われた。洲浜の風流などを伴わない純粹歌合であること、方人即ち歌人であるという形式、四季を通じた具体的な季題に祝・恋の人事題を合わせた歌題の設定など、約一世紀を隔てて盛んに用いられるようになった様式が既にしてここに見られ、歌合史上、極めて先駆的かつ文芸性の高いものであったと評価されている。萩谷朴氏はこうした特性について「本歌合の主催者たる花山天皇をはじめ、その側近の人々の、歌合乃至和歌全般に関する見識の高さを見るべきである」と述べられている。⁽⁶⁾ 十九歳の天皇と若き側近たちによって構成された内

裏歌壇が、いかにして斯様な特質を持ち得たかという点は、興味深い問題といえよう。

花山天皇といえ、藤原兼家一門による謀略によって、在位二年足らずにして突然、退位・出家に至った事件が知られている。本歌合は事件のわずか十三日前に催されたものであり、従来、そういった観点から注目を集めてきた。当時の政治的背景は先学のご論に譲るとして、本稿では歌合そのものの示す特質について分析を試みたい。本歌合の歌人構成とその出詠歌数は次の通りである。

【資料】 寛和二年内裏歌合

	(歌人名)	(出詠歌数)	(歌人名)	(出詠歌数)		
左方	大中臣能宣	七首	右方	藤原惟成	十二首	
	藤原齊信	一首		藤原実方	五首	
	藤原明理	二首		藤原道綱	〔道綱母〕	一首
	藤原長能	一首		藤原公任	一首	
	曾禰好忠	五(六)首		藤原道長	一首	
	藤原高遠	一(二)首				
	藤原敦信	三首				

※異伝が多く、認定しにくいものがあるが、原則として十巻本を基準に示した。^(?)

各歌人の詳しい人物考証は省くが、専門歌人を除くと天皇の側近や血縁・姻戚関係によって説明される人物に占めら

れているといえる。注目すべきは、曾禰好忠が専門歌人として参加していることであろう。晴れの儀である内裏歌合に、地下の身分の好忠が召され、出詠を許されているという事実には、内裏歌壇の性格の一端を窺い知ることができよう。

また、一見して明らかのように、出詠歌数に著しい偏りが認められる。長能、公任が各一首であるのは、当日の講師を務めたためかと推定されるが、能宣、好忠ら専門歌人の歌数が多いのはともかくとしても、惟成が十二首という突出した出詠数になっている。本歌合は撰歌合であり、個人の出詠数に規準があるわけではないが、十二首はあまりにも多いといふべきであろう。⁽⁸⁾

惟成は天皇の寵臣であり、花山朝では五位の身分ながら義懐とともに新政を担い、「五位の摂政」とまで呼ばれた人物である。⁽⁹⁾ 天皇の退位・出家事件では、義懐とともに後を追って出家し、そのわずか三年後にこの世を去っている。また年次不明ながら、『本朝文粹』第八に載る詩序には河原院への参集の跡を留めており、その交友圏を考える上で注意される。歌人としては三十三首から成る小家集を残しており、勅撰集には『拾遺集』一首、『詞花集』三首、『新古今集』五首、以下、計十六首が入集している。まずまずの評価を受けている歌人といえよう。

本歌合で、惟成は出詠歌数の多さのみならず、その歌風においても、他の歌人の詠の多くが古歌に寄りかかった無難な作で占められている中、新風を呈しており、注目される。まず、惟成の出詠歌のいくつかについて、以下にその特徴を指摘したい。

(一) 惟成の出詠歌

初めに「霞」題の歌について検討する。

① 昨きのよかも霞あられふりしは信楽しがらぎの外山とやまの霞春めきにけり (二)

a 故郷は春めきにけりみ吉野のみかきの原を霞こめたり (天徳内裏歌合・霞・二・兼盛)

b 三島江につのぐみわたる葦の根のひと夜ばかりに春めきにけり (好忠集・毎・三)

当該歌は「昨日こそ早苗とりしかいつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く」(古今集・秋上・一七二・不知)や、「昨日こそ年はくれしか春がすみ春日の山にはや立ちにけり」(拾遺・春・三・赤人/万葉・卷十・一八四三)に類似した形をとるが、⁽¹⁰⁾「昨日」と対比させて季節の変化を詠むこの詠法は、好忠、順、惠慶、重之の各百首に例が存し、この時代、好忠周辺の初期定数歌で特に流行したものと見ることができ。またこの歌は、故郷(信楽)に霞が立ちこめた情景を「春めきにけり」という表現によって統括する方法をaの兼盛詠に学んだと考えられよう。aの趣向は、好忠百首を初めとする初期定数歌に影響を与えたものであり、「春めく」の用語も、bに挙げた有名な好忠詠や順百首、惠慶百首など、好忠周辺で享受・展開された跡が認められるものといえる。⁽¹¹⁾

こうした初期定数歌周辺の新風和歌に通ずる特徴は、さらに指摘される。当該歌に詠まれた「信楽」は、聖武天皇の信楽宮の置かれた土地だが、先行する歌の例は次に示すc、dしか見られない。特に重之百首の歌の存在は注意されよう。また、「外山の霞」はこの後、模倣作を生んだ新鮮な表現であり、当該歌は「古今集」の「深山には霞降るらし外山なるまさきのかづら色づきにけり」を踏まえるが、この神遊歌に着目し、「外山」という場所を叙景的に詠む手法は、e、fなど好忠に特徴的なものといえる。

c 春立ちてほどは経ぬらし信楽の山は霞にうづもれにけり (重之集・百首・二二六)

d 信楽の峰立ちこゆる春霞はれずも物を思ふころかな (古今六帖・六〇八、一〇〇八重出)

e とやまなるまさきのかづら色 こきを見にくる人も見えぬ秋かな (好忠集・每・二七〇)

f 桜麻の刈生の原をけさみればとやま片かけ秋風ぞ吹く (好忠集・百・三九〇)

以上の如く当該歌には、好忠周辺の新しい趣向や表現が複数、取り入れられており、それが古風な調べと新しい叙景の獲得を可能ならしめているといえよう。つまりここには、初期定数歌周辺の新趣向に対する作者・惟成の理解の深さや意識の高さが窺われるのであって、逆に言えば、そうしたものととの関わりなくしては成立し得ない歌であると考えられる。この初期定数歌周辺の新風和歌との近接性という特徴は、これ以外の惟成詠にも強く認められる。次に「子日」題の歌を見る。

② 見わたせば野も狭せにたてる松の葉に若菜摘むべき年はかぞへむ (六)

a 見わたせばひらの高嶺に雪消えて若菜摘むべく野はなりにけり (天曆十年麗景殿女御莊子歌合・若菜・兼盛)

b みな人の手ごとにひける松の葉の数をぞ君がよはひとはみむ (能宣集・二八五)

c 年毎に生ひそはるてふ八十島の松の葉数は君や知るらむ (重之集・百首・祝・三二一)

②の歌は、aの兼盛詠と二句がほぼ一致しており、aを下敷きにしていることが想像される。また、「見渡せば」という表現で眺望的視野を表す詠法が、初期定数歌周辺で流行したものであることは、既に諸氏が指摘されているところである。当該歌の「松の葉数」を数えるという賀歌の趣向も、b、cを念頭に置いたと思われる。

③ 蛙なく井手のわたりに駒並べて行くても見む山吹の花 (一〇)

a 蛙鳴く井手の山吹散りにけり花のさかりにあはましものを (古今・春下・一二五・不知)

b 駒並めていざ見にゆかむふるさとと雪とのみこそ花は散るらめ (同・一一一・不知)

c 春の日はゆきもやられず蛙鳴く井手のわたりに駒をとどめて（重之集・百首・二三八：V・II・IV類本の形）⁽¹²⁾
「山吹」題の③は、a、bに挙げた古今集詠を合わせたような趣向であるが、cの重之百首の歌により高い類似性が認められ、これとの直接的影響関係が想定される。

④ 心して植ゑしもしるく撫子の花のさかりをいまでも見るかな（一四）

a 色見むと植ゑしもしるく山吹の思ふさまにも咲ける花かな（好忠集・每・七二）

b 花の木を植ゑしもしるく春くれば我が宿すぎて行く人ぞなき（拾遺・春・五二・兼盛）

c 手もたゆく植ゑしもしるく女郎花色ゆゑ君が宿りぬるかな（同・秋・一五七・不知）

d 手寸十名相 植之名知久 出見者 屋前之早芽子 咲爾家類香聞（万葉・卷十・二二一三）⁽¹³⁾

↓初句、定訓ナシ。二句、元曆校本・類聚古集・神田本の訓には「うゑしもしるく」とある。

④の第二句「植ゑしもしるく」は、好忠のaや、後に『拾遺集』に入集するb、cにも見える。他には『道濟集』に二例あるのみで、この時期これらに集中して見られる表現といえよう。こうした流行の原因を考えると、dに示した万葉歌の類似句の存在が注意される。「植ゑしもしるく」の表現は、dの万葉歌の訓点を契機として発見・享受され、流行を見たものではなからうか。しかもaやbが存在することから、その享受・展開の場には、好忠周辺を想定することができるとは思ふ。

⑤ 漁り火の浮かべる影と見えつるは波のよる照る螢なりけり（一八）

a 夕やみにあまのいさり火見えつるはまがきの島の螢なりけり（順百首・五〇〇）

b 旅人のたく火と見つる螢こそ露にも消えぬ光なりけれ（重之集・百首・二五二）

c いさり船まがきの島のかゞり火に色見えまがふ常夏の花（惠慶集・一三四）

d 山の端に月傾けば漁りする海人のともし火沖になづさふ（万葉・卷十五・三六二）

e 志賀の海人の釣りしともせる漁り火のほのかに妹を見むよしもがも（同・卷十二・三二七〇／拾遺「抄」・七五）

二、九六八重出

⑤の「螢」を「漁り火」と見る趣向は、aに示した順百首の歌に近似しており、影響関係を認めてよいと思われる。

aの歌の趣向は、bやcの如く初期定数歌周辺で様々に享受・展開されたものでもある。「海人の漁り火」はd、eのように万葉にいくつか例が存し、eが後に『拾遺集』に採られていることは、この時代、こうした万葉的な情景や素材が注目されつつあったことを想像させる。

⑥ 織女の雲の衣のうら解けて寝るほどもなく明くる天の戸（二一〇）

a 天の川霧立ちのぼる織女の雲の衣のかへる袖かも（万葉・卷十・二〇六三）

b さ、がにのもろてにいそぐたなばたの雲の衣は風やたつらむ（小大君集・八六／実方集・一四二）

c 夏の日を天雲しばし隠さなむ寝るほどもなく明くる朝を（新撰万葉・三一五）

d とけてすら寝るほどもなき五月雨をねざめがちにて明かすころかな（好忠集・毎・一三三）

⑥では「織女の雲の衣」という趣向が斬新である。「雲の衣」は漢語「雲衣」の翻案であり、歌ではbなど、ごく少数の例が見られるのみである。これには『赤人集』『家持集』にも見えるaの万葉歌からの影響を考えるべきであろう。下句の「寝るほどもなく明くる天の戸」という表現は、『新撰万葉集』に入るcに依拠しているかと思われるが、当該歌と「とけて」「寝るほどもなし」という表現が一致するdの好忠詠も無関係とは考えにくい。

⑦ 水上に滝の白糸見えつるは網代に氷魚のよればなりけり(二八)

a 水上に氷むすべはいはそ、ぐ滝の白糸乱れざりけり(惠慶集・百首・二四〇)

b 春くれば滝の白糸いかなれや結べども猶あはと見ゆらむ(拾遺・雜秋・一〇〇四・貫之／貫之集・四四)

「網代」題の⑦は、「滝の白糸」と「網代の氷魚」を「よる(寄る／繕る)」という掛詞によって結びつけたやや奇抜な歌といえよう。これについては、aの惠慶百首の歌との関係が想定される。当該歌はaの趣向を強引に取り込んだことによつて、このような奇抜な歌になつてしまつたのだろう。ちなみにこの「滝の白糸」を縁語仕立て詠む趣向は、bの貫之詠をもとに好忠の『毎月集』、重之百首などに摂取され、流行したものである。

以上の如く、惟成の出詠歌の多くには、好忠・重之・惠慶らの定数歌の新趣向を学んだ様子が顕著に認められる。そして同時にそれらは、好忠らと同質の万葉や古歌的なものへの興味を背景としていることを感じさせる。かなり安易に模倣している場合もあるが、その趣向や表現が由来するところについて、好忠らと同様の理解と認識を持ち、それに基づいて詠作しているように感じられる例も少なくない。惟成には河原院との接点もあることから、好忠ら河原院周辺の歌人と近い人物であつた可能性も想定されよう。惟成は従来、政治家としての側面ばかりが強調されて来たが、河原院と内裏歌壇とをつなぐ役割を果たした歌人の一人として、意外に大きな存在であつたのかもしれない。

またここで、後に『拾遺集』に入集する万葉歌や古歌との関係が少なからず指摘されることにも注意しておきたい。これは既に寛和期において、惟成周辺で万葉や古歌に対する関心が高まりつつあつたことを窺わせる。『拾遺集』における多量の万葉歌の入集といった現象は、そうした花山天皇周辺の古歌評価の動きの延長上にあると考えることができ

よう。

(二) 高遠の出詠歌

さて先述した如く、本歌合の惟成作以外の出詠歌には、先行歌に依拠した無難な作が多いのだが、その中で高遠の歌には新風的特徴を認めることができる。但し高遠の出詠歌については、『袋草紙』などによって好忠の代作説が唱えられており、作者を決し難いという問題が存する。⁽¹⁹⁾ここでは高遠作である可能性を持つ二首(一七・二三)について、好忠の作である可能性を残しつつ、検討しておく。

① 鳴く声もきこえぬものの悲しきはしのびに燃ゆる螢なりけり(一七)

a 音もせで思ひに燃ゆる螢こそ鳴く虫よりもあはれなりけれ(重之集・百首・二六四/後拾遺・夏・二二六)

b 同じくは告げてを恋ひむ難波女のしのびにのみや燃えてわたらむ(兼盛集・一八)

② 小倉山下草までに根を認めてさやかに見ゆる夜半の月影(二三)

a くまごとにこころさやけき秋の月小倉の山の影はいかがぞ(好忠集・每・二三〇)

b 大荒木の下草までに風吹けばなびきて神をまつりあへるかも(好忠集・每・一〇五)

①は、『詞花集』夏部に「大式高遠」作として入集している歌である。これはaの重之百首に拠っていることが明らかであろう。また②は、月影の明るさを「下草までに根を認めて」と表現した点に新鮮な着想が認められるのだが、好忠のaに類似の設定が、bに「下草までに」の同一句が存し、これらとの関係が想像される。

高遠に関しては、伝記研究からも好忠と比較的に近い間柄であったと考えられており、高遠のいわゆる「月次歌」が

形式的にも内容的にも、好忠の「毎月集」を模したものであることは既に論じられているところである。従つて、当該二首が高遠の詠歌であつた場合、それに好忠周辺の影響が認められるのは、必然性のあることといふべきであらう。

二 「寛和元年 内裏歌合」について

一前節で述べた如く、寛和二年の歌合では、惟成や高遠の出詠歌に「河原院周辺の新風和歌との近接性、万葉・古歌への着目」といった特徴が認められた。

ところでこうした特徴は、惟成や高遠個人の詠歌傾向や志向性に起因するものと捉えることも可能だが、次に示す寛和元年の内裏歌合の傾向を併せて考えるに、それは個人というレベルを超えて、この時期の内裏歌壇全体の方向性を示していると見るべきもののように思われる。そこで次に、寛和二年の内裏歌合に先立つて行われた、寛和元年の歌合について分析してみたい。

寛和元年八月十日の歌合は、歌合記に「殿上に俄かに出でさせおはしまして、侍ふ人人を取り分かせ給ひて、歌合せさせ給ひける、(以下略)」とあり、天皇の発案による即興的催しであつたと知られる。歌題は「月・風・野(野花)・露・鴈・虫」の六題、惟成を判者に、左方に天皇・為理・惟成、右方に公任・長能という構成で行われた。本歌合は参加歌人から見て、内裏歌合とはいふものの、天皇と側近のみで構成された極めて私的性格の強い催しであり、その意味ではこの時期の「花山院サークル」の雰囲気を寛和二年の場合よりも、より直接的に表すものといえよう。また、天皇自らが歌を詠み、方人となつて、それを臣下の詠と番えるという方法は特異であり、その点において小規模な歌合でありながら、歌合史上、重要視されているものでもある。

歌合全体を評するなら、即興の催しにしては出詠歌はなかなかの水準を示しているといえよう。特徴としては「妹」「我妹子」「背子」といった古風な用語や詠みぶりのものが目に付き、参加者たちが古風な歌を詠むことに興じている様子が看取される。その他の特質を以下に指摘する。

(一) 新趣向への興味

まず、本歌合の「露」題の歌に注目したい。

① 荻の葉に置ける白露珠かとして袖につつめどとまらざりけり(七／御製)

a つつめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙なりけり(古今・恋二・五五六・安倍清行)

② いかにして玉にも貫かむ夕されば荻の葉分けに結ぶ白露(八／長能)

b 玉笹の葉分けきにおける白露の今いくよへむ我ならなくに(古今六帖・三九五〇)

c 朝ぼらけ荻の上葉の露見ればや、はだ寒し秋の初風(好忠集・毎・一九二／新古今・秋上・三一一)

d 今日よりぞ荻の葉露けく吹く風の音につけてもまづとはれける(元輔集・一九二)

e 荻の葉にそよと聞こえて吹く風に落つる涙や露と置くらむ(安法法師集・七)

f 秋はなほ思ふことなき荻の葉も未たわむまで露はおきけり(和泉式部集・八三二)

両歌とも、「露」を玉に見立てるといふ伝統的手法を用いつつ、「荻の葉」に置く露を詠んだ点で共通している。さらにいえば、①は有名なaの古今集詠に依拠して詠んだもの、②の「荻の葉分け」という新しい表現は、bの古今六帖歌の「玉笹の葉分け(き)」を応用したものかと推定される。

ところで「荻」は周知の通り、風にそよぐ葉音を詠む趣向が類型化しており、荻の葉の上に置いた露を詠むという趣

向は、好忠の周辺で発したと推察される、比較的新しいものである。詠歌年次の特定は困難だが、c、fにその早い例と考えられるものを示した。河原院周辺歌人の間での広がり認められよう。但し、d、e、fは「露」に涙の比喩を重ねるといふ趣向の方に主眼が置かれており、この中では純粹な叙景歌として詠まれているcの好忠の例が、人々に季節歌の素材として「荻の露」を認識させ、その流行の端緒を開いた可能性が最も高いといえよう。

「露」題において、左右ともが同一の素材（荻）を選び取っているのは、「露」の詠み方としてこれが当時、参加者の間で最も注目されていたためであると思われる。従ってこの事例は、この時期の内裏歌壇が好忠ら河原院周辺歌人の新趣向に高い関心を有し、それを積極的に受容しようとしていた姿勢を示していることと見ることができる。

(二) 表現上の特質

次に、この他の出詠歌について参加歌人別に検討し、詠歌傾向の分析を試みたい。

[a] 惟成

① いつしかも行きて早見む秋の野の花の下紐とけはてぬらむ (五)

a も、草の花のひもとく秋の野を思ひたはれむ人などがめそ (古今・秋上・二四六・不知)

b 山もせに咲けるつつじのにくからぬ君をいつしか行きて早見む (家持集・三六／万葉・巻八・一四二八長歌の後半部、但し異同あり。)

c いで我が駒早く行きこそ真土山待つらむ妹を行きて早見む (万葉・巻十二・三一五四／古今六帖・二九八七／催馬楽「我が駒」)

② わが背子が旅の衣をうちはへてまつ雁がねのいまも鳴かなむ (九)

a 風寒み鳴く雁が音にあはすれば夜の衣は打ちまさりけり（順集・屏風歌・一八〇）

b 衣打つ砧の声を聞くなへに霧立つ空に雁ぞ鳴くなる（好忠集・毎・二三八）

c 雁鳴きて吹く風寒み唐衣君待ちがてに打たぬ夜ぞなき（新古今・秋下・四八二／貫之集・二六二）

↓「月帯新霜色 砧和遠雁声」（『白氏文集』の翻案。）

惟成の二首のうち、①はaの古今集詠に依拠しつつ、「いつしかも行って早見む」といった表現をbやcといった古歌に学んだものと考えられる。「花の下紐」も古風な感じをねらった表現といえよう。②は「わが背子」という万葉風の語を用い、女性の立場に立って詠んだ擣衣詠である。この擣衣と雁の声を併せて詠む趣向は『白氏文集』の詩句を踏まえたもので、早くcに挙げた貫之の歌に見える。これを受容し、展開したのがa、bといった初期定数歌周辺の歌であり、当該歌もこれらとの関係を想定すべきであろう。①、②には、惟成の古歌や初期定数歌の新趣向への関心の強さが窺われる。

さて、先に言及した通り、惟成は小家集を残しているが、家集に見える詠歌で、惟成の特質を表していると考えられる例を、併せてここに指摘しておきたい。

③ ともわかみ荻の下葉に置く露のさもほのめかす風のなきかな（惟成弁集・四）

④ なになれやいふにまされる花の色も井手の里人心くまねば（同・五）

a 山吹の花のさかりに井手に来てこの里人になりぬべきかな（拾遺「抄」・春・六九・惠慶法師／惠慶集・四二二）
↓もろともにいでの里こそ恋ひしけれ一人をりうき山吹の花（古今六帖・三六一二／大和物語一一三段）

b 月のいる山のあなたの里人とこよひばかりは身をやなさまし（惠慶集・一六五）

c わらび生ふる八田のひろ野にうちむれて折り暮らしつつかへる里人（好忠集・每・六五）

⑤ 風吹けば室の八嶋の夕けぶり心の内にたちけるかな（惟成弁集・一八／新古今・恋一・一〇一〇）

a 下野や室の八嶋に立つ煙思ひありとも今こそは知れ（古今六帖・一九一〇）

b いかでかは思ひありとは知らすべき室の八嶋の煙ならでは（金葉三奏本・三七八／詞花・一八八・実方）

③は惟成が先に言及した「荻の露」という表現に対応しているようであり、直接的な影響関係を想定させる。④の「井出の里人」は、「拾遺集」に入るaの惠慶詠との関係が想像されよう。「里人」は万葉に多い語だが、bやcの如く、この時期、好忠周辺で再び詠まれた跡が認められる。⑤は『新古今集』に入る惟成の代表歌である。「室の八嶋」はbの実方の歌で有名だが、その背景にはaの古今六帖に見える古歌の存在があると思われ、⑤はその受容例としてかなり早いものといえる。惟成の古歌や歌枕への関心を窺わせる例といえよう。つまり③～⑤には、惟成の歌合出詠歌と同様の傾向が指摘されるのであり、彼と河原院周辺歌人たちとの親近性を裏付ける特徴を示している。

b 長能

次に長能の出詠歌を検討する。八番歌に関しては既に述べたが、「風」題の「みかき野の草こそなびけ万づ代のはじめの秋の風の声かも」（四）は、漢詩文に多く見られる、天皇の徳によって君臣が草の如く靡く、といったイメージに祝意を込めた、古風な調べの歌といえよう。「野」題は次の一首である。

かりにとや妹は待つらむ秋の野の花見るほどは家路わすれぬ（六）

a かりにとて来べかりけりや秋の野の花見るほどに日は暮れにけり(古今六帖・一二二八/拾遺・秋・一六三・不知)

b わが家は行くほど遠し佐保川のしばしはをやめ妹も待つらむ(好忠集・毎・二六七)

c 散りそむる花を見すてかへらめやおぼつかなしと妹はまつとも(拾遺「抄」・春・五九・能宣)

当該歌はaとよく似た表現を有しており、何らかの關係が想定される。また、「妹は待つらむ」といった万葉風の発想・趣向は、bなどに見える好忠周辺の新風に影響を受けたものと思われる。cが『拾遺集』に採られていることから、こうした古風な趣向が当時から注目され、評価を受けつつあったことが想像されよう。なお、長能の家集の詠歌には、好忠周辺からの影響がさらに顕著に認められるのだが、それについては稿を改めて述べたい。

〔c〕 公任

公任の出詠歌のうち、「虫」題のものを見る。

秋ごとにとこめづらなる鈴虫の振りても旧りぬ声ぞきこゆる(一二二)

難波人あし火たく屋はす、たれどをのがつまこそとこめづらなれ(拾遺・恋四・八八七・人麿/人麿集・一七)

↓難波人 葦火燎屋之 酢四手雖有 己妻許増 常目頼次吉(万葉・卷十一・二六五一) ※新訓では結句「つ

ねめづらしき」。

当該歌は「振りても旧りぬ」に言語的趣向をほどこした一首だが、「とこめづらなる」という語に注意される。この語は『拾遺集』に入る万葉歌に見え、当該万葉歌の訓点を契機として、関心を呼んだと想像されるものである。ここに

こうした用語が見えるのは、本歌合で公任が意図的に古風な語を用いようとしたことによるのであろう。「難波人」の万葉歌は、当時注目されたものであるらしく、『高遠集』には「あし火たく屋」の語を受容した「冬ごもる難波の浦を見渡せばあし火たく屋ぞいぶせかりける」(高遠集・三八九)という歌も存する。

公任の「花山院サークル」における役割や位置づけについては、別途の考察を要する大きな問題と考えるが、寛和という早い時期に、花山天皇の文芸志向に親しみ、古歌や万葉歌への関心を窺わせている様子をここに読み取ることができよう。⁽¹⁸⁾

d 為理

為理は、天皇に近侍する一人であったと考えられるが、人物考証において説が分かれており、特定し難い。『夫木抄』その他では、これに「橘為義」を当てており、萩谷氏は「菅原為理」を、今井氏は「源為理」を想定されている。⁽¹⁹⁾

為理の出詠歌は「風」題の下に詠まれた、次の歌である。

大荒木の森の葛葉も吹く風にもみぢもあへず散りやしぬらむ⁽²⁰⁾
(三二)

「大荒木の森」といえば周知の通り、『古今集』に有名な「大荒木の森の下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし」(古今・雑上・八九二・不知)がある。当該古今集歌の「大荒木」に関しては諸説が存するものの、以後の「大荒木の森」詠においては、「森の下草」を詠むことが類型化している。従って、こうした類型をはずれている点で、当該歌は特異な発想に依っていると考えられよう。

当該歌の背景として、初期定数歌に次の二首があることは注目される。

a 大荒木の多くの枝もなびくまでたえずはげしき冬の山風（好忠集・毎・三五八）

b 大荒木のをざさがはらや夏をあさみ春まく葛はうらわかきかも（順百首・四九七）

a は「大荒木」という地名に、風の荒い森というイメージを重ねた独自の詠み方の歌といえる。為理が「風」題において、「大荒木の森」を詠んだのは、この好忠詠を念頭に置いてのことではないだろうか。また、b の順百首の歌に「大荒木」の「葛」が詠まれているのも、他に例の見られない詠みぶりであり、当該歌への影響が想像される。つまり、僅か一首ながら、為理詠にも初期定数歌の新趣向との関わりが感受されるのである。

以上の分析から、寛和元年の内裏歌合において、参加者の間に好忠を中心とする河原院周辺の新趣向や万葉・古歌風の表現に対する同質の興味が共有されているという特徴が指摘されよう。さらにその興味は、即興の歌合という方法によって確認・展開されていると見ることができるといえる。出詠歌のレベルの高さなどから考えると、こうした類の催しは、記録に残らない形でも、かなり頻繁に行われていたのではないかと想像される。この歌合のサークル的構成から見ると、これは花山天皇の内裏歌壇そのものの雰囲気や伝えていると言換えることも可能であろう。

このように考えると、先に指摘した寛和二年の内裏歌合で惟成や高遠に顕著であった詠歌傾向は、個人的な詠風もさることながら、内裏歌壇の志向性を強く反映していると判断すべきもののように思われる。寛和二年の歌合に、慣例を破って好忠が召されたのも、内裏歌壇の新風和歌に対する並々な関心の証左となろう。つまり、花山天皇の内裏歌壇は河原院周辺の新風に、この時期かなり傾倒していたと推察されるのである。⁽²¹⁾

三 結び

以上、寛和年間兩度の内裏歌合の検討から、内裏歌壇の特質とその背景について考察してきた。結論として、以下のことを指摘したい。

第一に、寛和期の兩度歌合の出詠歌には、天皇周辺のいわゆる「花山院サークル」の歌人たちが河原院周辺の新風和歌に強い関心を持ち、それを積極的に撰取しようとした姿勢が窺われるということ。それは、従来指摘されてきた、花山天皇の内裏歌壇が示す文芸性の高さといったものが、河原院周辺に蓄積されていた特質を継承することによって成立したものであることを暗示しているといえよう。特に、惟成、長能といった歌人は、河原院周辺の特質を「花山院サークル」に導入する役割において、重要な存在であったと考えられる。

第二に、内裏歌合の出詠歌には、万葉や古歌表現への興味とそれを受容しようとする態度が認められるということ。それは特に寛和元年の歌合に顕著であり、全体として古風な歌を詠むことに興じている様子が感じられる。

さて、万葉や古歌への関心の高まりは、この頃、『古今和歌六帖』が成立し、万葉の古点資料の流れを汲む『人麿集』や『赤人集』が、『拾遺集』ごろまでに成立してくるといった現象に象徴されているといえよう。内裏歌壇の周辺には、関心の高まりに応じて、そうした和歌的資料が当然、多く集められたと想像される。万葉の二次的資料を多く含む、こうした資料類の集積が、寛和期における内裏歌壇の特質を形成する一助となった可能性は高いと考えられる。

但し、斯くの如き万葉・古歌への関心の高まりは、やはり河原院周辺の動向に連関するもののように思われる。とりわけ好忠の「毎月集」が、万葉取りという手法において新しい和歌表現の可能性を提示した意義は大きかったというべ

きであらう。若く、進取の気性に富んだ歌人たちにとって、好忠の新風がどれほど魅力的なものに感じられたかは想像に難くない。

若き花山天皇の側近に惟成、長能といった新風を志向する者たちがおり、同時に天皇自身もそれを好まれたこと、加えて豊かな和歌的資料の存在を背景に公任や実方といった優れた歌人がおり、さらに梨壺の五人の一人である能宣、河原院の新風の担い手・好忠らを取り込んだことよって、寛和期の内裏歌壇は時代に先駆けた文芸性を持ち得たのであらう。

通説に従えば、この二十年ほど後に、公任の『拾遺抄』を増補する形で、花山院の『拾遺集』が編まれたことになる。寛和期に既にして認められる、天皇周辺の志向性や特性は、そうした和歌史的展開を十分に予測させるものといえるのではなからうか。しかしそれは、さらなる分析を要する問題であらう。本稿では寛和年間という短期間の検討に留まったが、天皇退位後の「花山院サークル」の展開に関しては、今後の課題としたい。

注

(1) 歌合については、久曾神昇氏『伝宗尊親王筆歌合巻研究』(尚古会・昭12)、萩谷朴氏『平安朝歌合大成 一』(同朋社出版・平7)などの文献を参照した。

(2) 今井源衛氏『花山院の生涯』(桜楓社・昭43)に詳しい。能宣らの家集を召したことは『能宣集』序文に、「それ三十一字の詠、わづかに家風をあふぐといへども、万葉集のつたへすでに古賢におよびがたし、(中略)むなしく数年を送りてよりこのかた、円融太上法皇の在位のするに、勅ありて家集を召す、今上花山聖代、また勅ありて同じき集を召す」(西本願寺本)と見える。

- (3) 小町谷照彦氏「拾遺集時代の和歌」(国語と国文学・昭41・7)、「拾遺集の本質」(同・昭42・10)など。
- (4) 久保木寿子氏「和泉式部の詠歌環境―その始発期―」(国文学研究・昭55・6)。
- (5) 以下、歌合本文については、萩谷氏「平安朝歌合大成 一」(八七・八八所載の『十卷本歌合』に拠り、必要な場合は異同を記した。その他の引用歌については基本的に「新編国歌大観」(角川書店)に拠った。なお、引用に際して『好忠集』内の「毎月集」の歌には「毎」、「百首歌」の歌には「百」の略称を用いてある。「順百首」は「好忠集」の歌番号を記した。また、『拾遺集』の歌のうち、『拾遺抄』にもあるものに関しては「拾遺〔抄〕」のように示した。
- (6) 萩谷氏(前掲書)、「史的評価」の項。
- (7) 一二番歌は、『拾遺集』その他から、道綱母の代作であると知られている。三四番歌は、十卷本に「能宣」とあるが右方の歌のため、実方(二十卷本の表記に拠る)の詠と見なした。
- (8) この出詠数の不均衡については諸説ある。今井氏は花山政権の政治的孤立から、歌合当日、欠席者が相次ぎ、惟成がその穴埋めをしたことによるのではないかと推定され、萩谷氏は惟成が君寵を恃んで、撰歌合でありながら、過半数を自歌で一人占めする程に我物顔に振る舞った、と解されている。真相は不明であると言わざるを得ないが、撰歌合であることを重く見るなら、惟成の新風の傾向が評価され、結果的に過半数もの出詠が実現したという可能性も考えられようか。
- (9) 惟成に関しては、今井氏(前掲書)、白田甚五郎氏「藤原惟成」(『平安歌人研究』三弥井書店・昭51)、久保木哲夫氏「惟成弁とその集」(『平安時代私家集の研究』笠間書院・昭60)などのご論がある。
- (10) 当該歌は、二十卷本に「昨こそ藪ふりしか」という、より先行歌に近い形で見える。
- (11) 拙稿「天徳四年内裏歌合と初期百首の成立」(『三田国文』平3・6)で述べたことがある。
- (12) 重之百首については、川村晃生氏「簡校『重之百首』」(『撰関期和歌史の研究』三弥井書店・平3)を参照し、その分類に拠った。
- (13) 『万葉集』の歌は旧番号を示した。特に必要な場合は、西本願寺本の原文と訓を挙げた。訓については『校本万葉集』(岩波書店)を参照した。
- (14) 「歌仙も晴れの時歌を人に乞ふ、常の事なり。花山院歌合の時、高遠卿は好忠に詠ましむ。」(『袋草紙』)とある。

(15) 藤原高遠の「月次歌」については、鷲頭裕子氏「大弐高遠の歌風について」（大妻女子大学大学院文学研究科論集・平4・3）、松本真奈美氏「『大弐高遠集』「月次」歌について」（国語と国文学・平7・7）がある。

(16) 貫之の擣衣詠については、渡辺秀夫氏『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社・平3）などに詳しい。

(17) 『古今和歌六帖』は、通説では九七六年から九八三年の成立とされており、寛和頃、既に形を成していた可能性は高いといえよう。また、長能が『拾遺集』の撰集に関わったという説との関係に於いて、aの歌が『拾遺集』に入っているのは、興味深い現象である。

(18) 公任については、村瀬敏夫氏『平安朝歌人の研究』（新典社・平6）、伊井春樹氏「歌壇の動向―花山院と藤原公任」（国文学・平元・8）、などのご論を参照した。

(19) 『後拾遺集』は、本歌合の八番歌「いかにして珠にも貫かむ夕されば萩の葉分けに結ぶ白露」を「寛和二年八月七日内裏歌合によみ侍ける／橘為義朝臣」として掲載する。

(20) 十巻本では、初句「おはらきの」とあるが、二十巻本、『夫木抄』の如く「大荒木の」が本来の形と考えた。

(21) ちなみに、花山院の詠歌を検討してみると、三例程度ながら同様の傾向のものが認められた。但し、『花山院御集』は散逸しているため、今井氏が他文献から収集された一二〇首弱に久保木哲夫氏が古筆断簡と推定されたもの（『花山院御集考』『平安時代の和歌と物語』桜楓社・昭58）を加えて検討を行った。

〔付記〕 本稿は、平成八年十一月の慶応義塾大学国文学研究会、および十二月の和歌文学会例会に於ける口頭発表に基づいている。御教示くださった先生方に深く御礼申し上げます。